

完全側臥位法により完全経口摂取移行となり、在宅復帰した1症例
～関係施設との情報共有の重要性について～

津生協病院

リハビリテーション科1) 内科2)

中森玲子1) 宮崎智徳2) 井出宏1) 小川貢央1) 山本仁志2) 吉川真史2)

はじめに

当院入院時には経管栄養のみであった症例が、完全側臥位法の導入によって経口摂取へ完全移行となった。その結果自宅退院が可能となったので、ここに報告する。

症 例

80歳代男性。201×年1月、脳梗塞発症しA病院搬送、右片麻痺、失語症、重度嚥下障害。同年3月、リハビリ目的でB病院に転院、胃瘻造設術施行。同年7月、自宅退院前の再度のリハビリ目的で当院入院となる。

当院入院時は胃瘻からの経管栄養のみであった。嚥下内視鏡検査で姿勢と形態の評価を実施し、徐々に栄養方法を経口にシフト。その際栄養管理目的でNSTの介入となる。介入前は経口からは楽しみ程度のゼリーのみであったが、嚥下内視鏡検査の結果に基づき完全側臥位法でペースト食を経口摂取開始、徐々に経口摂取の割合を増加させていき9月栄養経路が経口のみとなった。11月自宅退院前には、当該患者の家族と他在宅ペースト食の患者家族が交流・情報交換する場を設けた。退院にあたって関係施設と担当者会議・パンフレットを用いての説明・実際の食事場面の見学による情報共有を行った。その結果施設でも完全側臥位法での経口摂取を実施して頂けることとなり、退院後も完全経口摂取継続のまま介入終了となった。

まとめ

完全側臥位、食形態、また補食の使用により経口摂取のみで必要量が安定して充足可となった。このことにより自宅退院が可能となり、本症例と家族のQOLをアップすることができた。